

正会員 ○渡辺 治*2
同 高橋鷹志*1

公共的空間に於ける人間行動観察

1. 目的

これまで、都市の中の空間に対しては、イメージマップやアンケートによる大雑把な印象の把握によるものが通常であった。しかし、それでは部分が心理に関わる事項に関しては予想するしかなかったのが現状であった。今回の調査は都心の路上に存在する人間行動を第3者的立場で観察することにより、行動を定義づけ、類型化しようと試みる。人間行動の中には自分が無意識に行っているものが少なくなく、その中から人の深層心理に関するメッセージが読み取れると考える。

2. 調査の方法

もっぱら観察と撮影による記録によった。

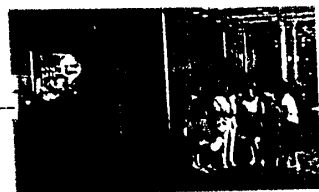
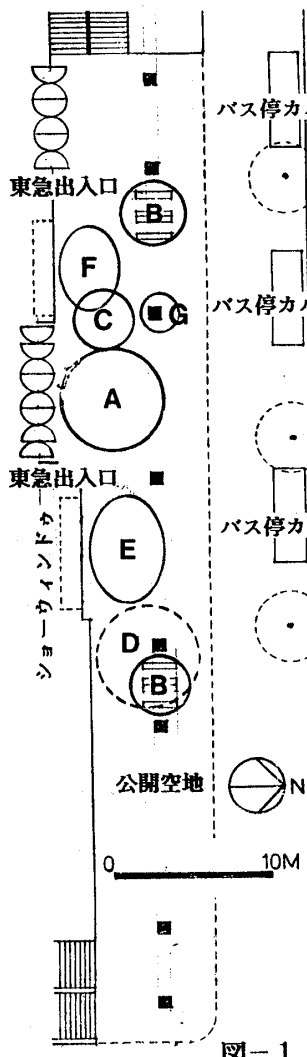


写真1. A空間：方向判断空間



写真2. B空間：観察場・休憩場



写真3. C空間：溜まり空間



写真4. D空間：舞台単位の形成



写真5. E空間：振り向き空間

3. 人間行動調査事例

■札幌東急ストア前公開空地+バス停 (図-1)

○公開空地の上のオーバーハングにより形成される境界

- ・直射の強い日中：①日向と日陰の境 ②顔に直射日光が当たらない足の限界位置 ③底の直下の線
- ・雨が降っている時：①雨で濡れている床と濡れていない部分との境 ②底の直下の線

○公開空地内の各部空間と頻度の高い人間行動

- ・A空間：方向判断空間-建物から出てきた時に次に歩く方向を定める為に少し立ち止まる (写真1)
- ・B空間：観察場・休憩場-ベンチにバスの方向を見ながら座っている (写真2)
- ・C空間：溜まり空間-家族等の集団が会話をしながら滞留する (写真3)
- ・D空間：舞台単位の形成-テレビ見ている集団。舞台単位の形成が不完全である場合、テレビと観戦者との間を通り抜ける者が増える (写真4)
- ・E空間：振り向き空間-多くの女性が振り向くが男性は殆ど向かない (写真5)
- ・F空間：振り向き空間-E空間と同様にショーウィンドウがあるが、E空間と比べて、注目する者があまりいない。 (写真6)
- ・G空間：待ち柱-この柱に寄り掛かるか、この柱に身を寄せてバス待ちをする人が他の柱に比較して非常に多い (写真7)

○バスの乗り場空間

- ・時間によって並び方に相違がある。 (図-2)



写真6. F空間：振り向き空間

写真7. G空間：待ち柱

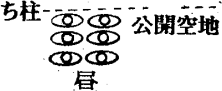


図-2. 昼と夕方の並び方

札幌東急デパート前公開空地

■ IBMタワー公開空地（ギャレリア）—NY

- ・空間A：撮影・驚き空間—見学者は主にE2出入口から連れられてくる。ラインJとの中間に立ち止まり上を見上げたり、写真を撮る。一人で入ってくる場合にも同様な行動がここ繰り返された。写真撮影者が選ぶ空間はA' 空間まで広がる。（写真8）
- ・空間B：通り抜け空間—通り抜け者多く、その時にラインJ側に経路が膨らむ傾向がある。（写真9）
- ・空間C：学生・主婦溜まり空間—50cm程度上がっているジュウタン貼りの場所。ラフな姿勢での読書や乳母車を持った主婦達がくつろいでいたり、カジュアルな行為が集中している。逆にビジネスマンや老人は近寄らない空間。比較的長時間滞在者が多い。また、観察場として使用される。（写真10）
- ・空間D：エントランス空間（方向判断空間）—E7からくる人でIBMビルに入る人達によって使用されている。A空間との違いは、空間に注目する人や撮影する人がいないことである。行動的特徴は東急前空間Aと同様に（空間D'）IBMのビル側から出てきた人が立ち止まり行く方向を判断したり、話し合う空間である。東急と違うのは、顧客を送り出す空間として使用されていること。（写真11,12）
- 空間E：新聞読み・休息空間—ラインJに沿う空間でプラントボックスとベンチが交互に並べられている。IBM側の空間の方向を向いて新聞を読む人が多く観察され、E2からくる見学者は殆どがこの空間で休息を行う。これはIBM側空間が私的空間として認知されるからであろう。（写真13）
1989年09月28日（木）11:00
B1-食事（2人）+日本人の見学者（1人）
B2-通路側観察者（1人）+空間観察者（1人）
B3-新聞読み（空間側を向いて）（1人）
B4-新聞読み（空間側を向いて）（1人）
- ・空間F：休息空間—この空間に慣れている人が新聞を読んだり、休息等をする場合。またテーブルに座れない場合にここでスタンドIで買った軽食を取る。E2からE4～E6の出入口に通り抜けする場合の経路となる空間な為に、竹やプラントボックスの緩衝帯があるが、十分にプライベートな空間と成りえず、長時間滞在者はあまりいない。この空間の中でも通過経路とならないE3の出入口に近い部分では観察場と

なりにくくプライベートな空間になりやすいにも関わらずあまり利用されない。（空間F'）事例を示すと以下のごとくであった。（写真14）

- B5-使用者なし B6-休息（空間側観察）（1人）
- B7-読書・空間側観察（1人） B8-読書（1人）
- B9-休息（1人） B10-休息（3人）
- B11-道路側の空間観察（1人）

- ・空間G：食事・会話空間—非常にプライベート性が高い空間となっており、いわゆる境界のテラス的性質が強く、比較的長時間滞在者が多い。（写真15）
例えば図に示すように各テーブルに番号をつけると
1989年09月28日（木）AM11:15
1—勉強（1人） 2—仕事（1人）
3—会食（2人） 10—新聞（1人）
11—チェス（1人） 12—新聞（1人）
13—食事（1人） 14—食事（1人）
15—休息（1人） 16—ミーティング（3人）

これにはテーブルが対話式であることが非常に貢献しているようであるが、見学者やこの空間に慣れ親しんでいない人達はあまり利用しない。（この空間に親しんでいるかどうかは、この空間に入って来た時に空間を見回したり、立ち止まって躊躇しているか、またはすぐに空席を探しあてて空間自体に驚きを示さずに真っ直ぐに席に着こうとするか否かで見分けることが出来る。）

- ・空間H：界限空間—ここは非常に老人に占拠されているテーブルが多い。一番観察場として良好な条件を備えている。最も長期滞在者が多い。こうした公共空間の中で、老人達が非常にプライベート性の高い空間を作っている例である。（写真16）

事例は以下のものであった。

- 1989年09月28日（木）AM11:15
4—食事（1人） 5—会食（2人）
6—会食（2人） 7—新聞（1人）
8—休息（1人） 9—休息（1人）

- ・空間I：軽食スタンド—基本的には何処からも買える円形のスタンドなので、列は形成されてはいないが昼食時間帯には列が形成される。（写真17）

- ・ラインJ：空間境界線—以下のような人間行為によってここに境界線が存在することが理解できた

i) E1からE3または逆に通り抜けが行われる時にア

トリウム側に経路が歪んでいく場合があるが、このラインからは越えることはない。

ii) このラインの直下を歩く人がある

iii) E2からこの空間に入ってくる見学者はこのラインからE2側の空間にしばらくとどまるがライン

を越えようとはしない。

iv) トランプタワーの店員がこの空間に時々入ってきてぶらつくことがあったが、このラインを越えることはなかった。(ラインまではくるが、そこから引き返していく) (写真18)



写真8. 空間A: 撮影・驚き空間



写真9. 空間B: 通り抜け空間



写真11. 空間D: エントランス空間



写真12. 空間D': 立ち止まり空間

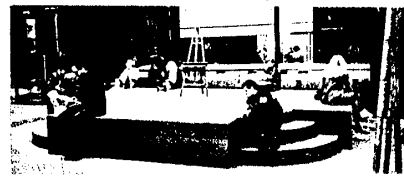


写真10. 空間C: 学生・主婦溜まり場空間



写真14. 空間F: 休息空間



写真18. ラインJ: 空間境界線

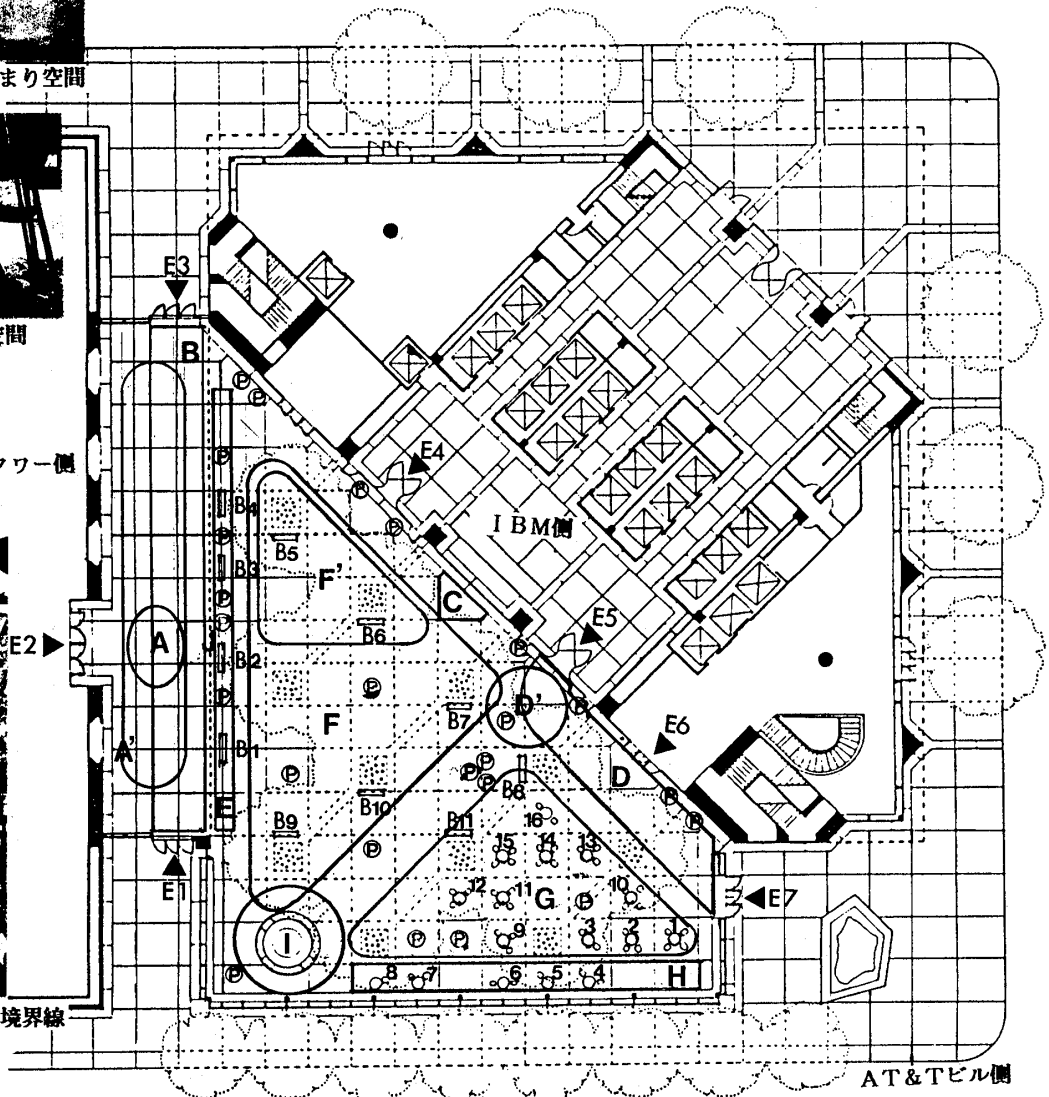




写真13. 空間E: 新聞読み・休息空間



写真15. 空間G: 食事・会話空間



写真16. 空間H: 界限空間



写真17. 空間I: 軽食スタンド

4. 歩行行動に影響する要素

以上の結果から歩行に影響する要素を考察した。

- ① 娯楽性— 通行路の両側に何が見えるかによって視線や通行する経路に影響を与える。
- ② 快適性— 日向、雨、気温、風等の生態に訴えてくるような要素。
- ③ 合理性— いわゆる最小エネルギーの行動。最短。
- ④ 休息— 壁際や柱に寄り掛かる、ベンチや代用物に座る等の行動。その際にどの壁や柱を選択するかはそこが通路になっていないことが重要な要素となる。

5. 公共空間に影響すると思われる要素

- ① 公共性— 又、これに関わる要素は以下が考えられる。
 - ・ 視認性: 通りやビルと視覚的な相互関連性があるか。
 - ・ 通りとの連続性: この空地がある程度通りと連続しており、アクセスがし易いだけでなく、感覚的に通りの一部で不特定多数の共有空間といった性質を持っていること。
 - ・ ビルからの独立性: 上述の項目と同時にどのビルからも独立し、どのビルの所有空間でもないという印象をこの空間は持っていること。
- ② 必然性— この空間がそこに有るべき理由がなければ有効性は発揮されない。つまり、人の行かないようなエリアに空地を作っても何も意味がなく、人が行く目的が空間に接するビルにあるか、その空間自体になくはならない。
 - ・ 隣接ビルの用途: ビルの1階部分が公共性の高い用

途で利用されていれば、一般人による空間の利用性は高まってくる。

- ・ 空間の用途: スタンドを設けるなどして空間に用途を与えるとまた利用性は高まる。
- ③ 娯楽性— 利用性の高い空間や空間の部分に注目してみると、それが観察場となっている場合が多い。また、視覚・聴覚的に楽しませる要素が含まれていることに気付かされる。特に長時間滞在する場合においてこの要素は不可欠となってくる。
- ④ 包容性— 空地があれば行為が生じる可能性があるわけではなく、公共空間ではベンチやステージといったもので設定してやらねば生じない行為がある。
- ⑤ 快適性— 気温に関する過ごしやすさは比較的定義しやすいものの、開放感に関する定義はやや難解である。しかし、少なくともIBMとAT&Tビルでは、IBMビルの公開空地の方が1年を通じて利用率が高い。これは、内部化の為のみでなく、天空の開放感が居易さに関与していると思われる。Jan Gehlは“Life Between Buildings”の中で環境的に快適な場所の人の滞在時間が長くなることを示している。*

6. まとめ

公共の空間では同じ場所で同様な行動が観察される場合が少なくない。これは明らかに物的環境が人間行動を規定している証拠で、逆にこういった人間行動をスケールとして空間を理解し、論議できるまで一般化することがこれからの課題である。

*Gehl, Jan. "Life Between Buildings" 1980 (English translation 1987)

*1 東京大学教授・工博 *2 同大学院